先生なら、どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「君に教師になってほしい」家業を継ぐ考えの生徒に担任として勧めた狭き門への挑戦

長野県野沢北高校
柳沢 敬

やなぎさわ・けい ● 同校に赴任して４年目。校長。地理歴史・公民科の教師として教壇に立つとともに、新任の頃から部長、監督として高校野球にかかわり、学校と地域に愛されるチームづくりに取り組んできた。2022 年度より、母校である野沢北高校の校長を務める。

野球部のＡ君は、周囲に対して細やかな気配りができ、部員全員の力を引き出せる主将でした。対戦相手の監督が「こんなに伸び伸びと試合に臨むチームは初めて見た」と言うほど、Ａ君はチームを見事にまとめていました。

30 代だった私は当時、野球部の監督であるとともに、クラス担任として３年間、Ａ君にかかわりました。彼は高校卒業後は父親の商売を継ぐ考えで、高校在学中から家業の手伝いをしていました。しかし、私はＡ君は教師に向いていると思っていました。Ａ君の店を訪ねた折には両親に、野球部やクラスでのＡ君の様子を伝え、「息子さんは高校教師に向いていると思います」と話しました。もちろん、本心からの言葉でしたが、両親は笑顔で「うちの子には無理ですよ」と答えました。

３年生の夏の大会が終わり、野球に没頭していた部員たちも本気で進路を考える時期が来ました。私はＡ君に教師への道を勧めるかどうか悩みました。就職氷河期だった当時の採用試験は狭き門で、家業を継ぐと決めていた彼に、その険しい道を勧めることにためらいがありました。しかし、Ａ君に同僚として教育に携わってほしいという思いを私は諦められませんでした。

ついに私はＡ君に「大学に進んで、教師を目指さないか？」と伝えました。Ａ君は驚き、「僕に教師なんて無理です」と言いました。しかし、私から教師の仕事の魅力を粘り強く説かれるうちに、彼の中で日に日に教師になる将来のイメージが膨らんでいきました。そして私はＡ君宅を訪ね、両親に言いました。「無責任と言われるかもしれませんが、Ａ君には教師を目指してもらいたくて、彼と話し合ってきました。そして彼も決意しました。どうか認めてあげてください」と。両親は驚いた様子でしたが、気を取り直し、「先生は本気だったんですね。分かりました。息子に任せます」と答えました。

Ａ君は世界史の教師を目指し、大学に進学しました。目標までの道のりは予想以上に厳しいものでした。私もできる限りの支援をしましたが、講師として働く時期が長く続き、講師の採用もない年度は他教科の助手に応募したこともありました。自分の選択を後悔しているのではないかとＡ君を心配しましたが、彼はいつ会っても明るく、生徒との時間を大切にしている様子でした。大学を卒業して10 年後、Ａ君は本採用され、今や誰もが長野県の教育を担う人材と認める教師になりました。Ａ君の活躍を聞く度に、私はうれしくなるのです。

既に自分なりの目標を持っていたＡ君に対して、柳沢先生はどのような思いで「別の目標」を提示したのか。生徒の進路選択において教師が果たすべき役割などを柳沢先生が語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。

https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article34491/

イラスト：カモ